

二十歳のころ

C 班 尾崎 枋倉 堀内

＜研究動機＞

経営資源も中で「ヒト」が重要視されているという学びや、機械化が進んでいる現状などから、私たちは、「ヒト」にしかできない職業であり、国や地方の中心に立ってご活躍されている政治家に、インタビューをお受けいただく対象者として目を向けたいと考えた。メンバーの一人が、市民に寄り添う政治家の姿を見て、この企画に協力していただきたいと思い、富士見市議会議員の加賀ななえ先生にお話を伺う機会をいただいた。

＜取材させていただいた方＞

富士見市議会議員 加賀ななえ先生

1991 年埼玉県ふじみ野市出身。小中学校は不登校生徒として過ごす。高校中退後、大検を取得し、明治大学政治経済学部を卒業。地域の声を政治の現場に届けたいという想いから、2016 年に市議補欠選挙で初当選となり、教育・福祉等の問題に取り組みご活躍されている。

＜インタビュー内容＞

政治家について

・普段されている活動について

議会は 3・6・9 月に行われ、そのうち月曜日から金曜日は市役所に勤務されており、土日は地域のサークルやボランティア活動、趣味としてスポーツなどをされている。また、駅前での挨拶運動や市政ニュースを作成し、配布するなど、市民に寄り添い、多方面に渡り活動されている。

- ・政治家の道を選んだきっかけ

小中学校を不登校生徒として過ごしていた。大学生時代にスペインへ留学に行ったことで、自分の不登校という過去の経験が悪かったのではなく、社会の仕組みが悪かったということに気づき、今の教育政策を変えたいと思う。その後、政治経済学科だから、政治関連で出来ることは何かあるだろうかと考え、議員インターシップに参加される。大学卒業後、富士見市議会議員の方から声をかけられ、議員に立候補することを決意した。

- ・市民に一番身近な政治家になるために大切にしていること

見える活動をする。

具体的には、駅に立って挨拶運動を行うことや、市民からの声を聞くために連絡を取りやすくすること、Instagram や Twitter などの SNS を上手に活用し、一日一回以上の情報発信を行っている。

- ・仕事のやりがい

挨拶運動や情報発信などを行ったことが実を結び、不登校のガイドライン制定や、適応指導教室の充実、市民の声を政治に反映させるなど政策改定の一步を踏み出した。このように、自ら考案したことが政策に取り込まれることや、市民に影響を与えられたことが仕事のやりがいとなっている。

- ・これからの目標、理想像

不登校の子供も学習できる環境を作ることや、同性カップルを婚姻関係に相当する関係と公認するパートナーシップ制度などの政策を作り、多様な学びや生き方を広めていき、それらが認められることなど。どのような環境の人でも生きやすい市を市民の方々と共に作っていくことを目標とされている。

二十歳のころについて

- ・二十歳の頃の将来像

当時、将来像は特に何も持っていなかった。将来の夢を考える余裕よりも今を生きることに関心一杯で、生きづらさを感じていた。

- ・二十歳までに身につけるべき力

様々な生き方を知っておくこと。人生は嬉しいこと、苦しいことがあるが、それを知っておくことで道が開けるかもしれないということを心に留めておくが良い。

- ・学生時代にやっておいて良かったこと

海外に行ったことで、多様な価値観に触れたこと。それにより、自分の考えが間違っていないことに気づくなどの新たな発見があった。また、大学生という余力がある時期にたくさん旅行に行くなど、時間を有意義に使うこと。

<インタビューを終えて>

加賀先生には、誰にも負けない決断力と実行力があったからこそ、キャリアを積んで立派な政治家になられたのだと考えた。この加賀先生の何事にも懸命な姿勢から、私たちは、様々な価値観に触れることや、いろんな視点から物事を考えることの重要性や、それにより、自分の選択肢を広げることができ、より確固とした自分が形成されるということが分かった。私たちにはこれから就活があり、自分のキャリアについて考え、選択しなければならないが、今回のインタビューで学んだことを活かし、1つの答えに決めつけず、多様な見方ができるよう努める必要があると考えた。